府中町ふるさと歴史散歩〔第6回〕

文化財としての考古学の資料②（弥生時代の資料）

府中町における貝塚の実態は、今から74年前の大正時代に吉野益美先生が府中・温品中山・矢賀一帯を調べ「広島付近の貝塚」として『考古学雑誌』に発表したことに始まる。

それには貝塚は、鹿籠（こごもり）・八幡・浜田・長福寺の南門・城山（じょうやま）・石井城に見られ、その数23ヶ所とある。貝塚の分布は府中町の北側に多く、なかでも城山の台地縁辺部に集中している。各々の貝塚の詳細な記録と採集遺物の記載はないが、府中町を含む周辺部62ヶ所の貝塚から採集した土器は、弥生時代の特徴を示している。

しかし、昭和50年代初めに町史編纂のために再調査したところ、ほとんどの貝塚は消滅しており、また、府中町の貝塚の年代は弥生時代のものとやや新しいものとがあるようだ。

『安芸府中町史』第二巻資料編に記載されている府中中学校所蔵の土器片（図1）の模様は、典型的な弥生時代のものである。この他に城ヶ丘の大窪谷（おおくぼだに）遺跡で大量の須恵器（すえき）と土師器（はじき）に混じり弥生式土器が出土している（図2）。

紀元前300年から西暦300年は弥生時代と呼ばれ、稲作農耕が始まり鉄製農具などの使用で、社会が急速に質的な変化を遂げた時代である。

最近、科学的な年代測定により弥生時代の開始が一挙に500年早くなると学会で発表され、その賛否をめぐり論議されているが、新しい研究方法の導入により過去の研究データが覆されることはよくあることだ。

府中町文化財保護審議会
会長　横田禎昭

問い合わせ
教育委員会生涯学習課
☎286―3272

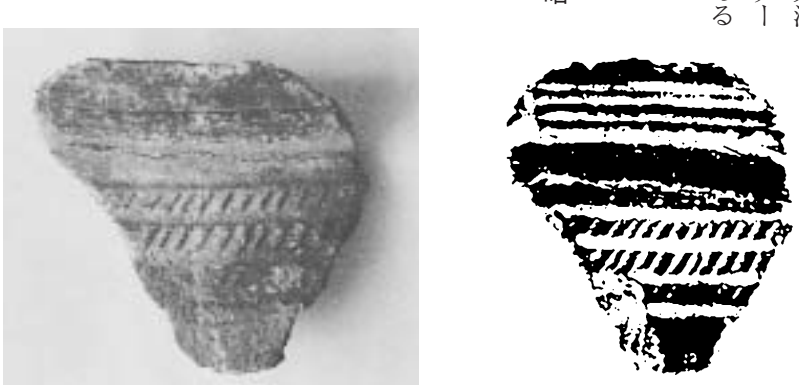

図1　府中中学校所蔵の弥生式土器片（右は拓本）

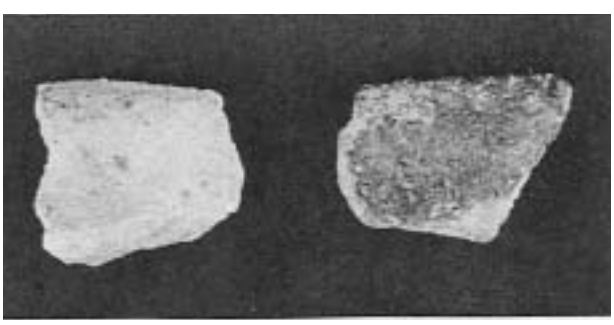

図2　大窪谷遺跡出土の弥生式土器片